

# 多様性へのあこがれ

2024年4月26日

学長 田林 暁一

種々のアンケート、また学長カフェにおいて、学生から多様性へのあこがれと思われる発言がある。その大きな背景は本学が保健医療分野（2学部3学科）、社会科学分野（3学科）、保健教育分野（1学科）、家政分野（1学科）の2学部8学科からなり、それぞれの学科に将来の夢を託して入学してきた学生同士が意見交換し、何か自分には無いものが得られるのではないかという期待感、新鮮さ、また新たな目標の取得等に大きく関与してくるのではないかと思っている節がある。多様性から受ける感じは玄人筋に受ける言葉で、粹な印象も受ける。ただ、その言葉の核心が何であるのか、また、その良好な獲得法については明らかではなく、今後、デジタル化の推進に伴うグローバル化と共にその意味付け、位置づけ、良好な取得法等は重要になってくると思われる。

多様性は、腸内細菌の動態でも用いられる用語であり、腸内細菌の多様性が体及び腸内の健康状態に関係すると言われている。腸内細菌は200種以上あり、数的には500兆から1000兆個あり、人間の総細胞数が約37兆個であることを考えると相当な量である。また、腸には1億個の神経細胞があり、脳に頼らずに消化管の制御ができることより、第2の脳とも呼ばれている。腸内細菌は大きく、3つのグループ、①ビフィズス菌、乳酸菌（善玉菌）、②連鎖球菌バクテロイデス（日和見菌）、③ウェルシュ菌、クロストリジウム（悪玉菌）に分類され、それらのバランスが重要で、2:7:1が腸内細菌の多様性の観点から、最も良いとされている。いわゆる21世紀病と言われるアレルギー疾患、花粉症、うつ病、また胃腸疾患は腸内細菌のバランスと関係すると言われている。

いわゆる人の多様性も腸内細菌の動態と同様と思われ、多くの人との付き合い、話し合い、議論、好きになったり、嫌いになったりの繰り返し等から、それぞれの人の人となりを判断、見極め、分類して各人にあったバランスを得ることにより良好な多様性が生まれてくるのではないかと思う。得られた良好な多様性は永続的ではなく、環境、社会不安、ストレス等により崩れてくることがあるので注意が肝要である。ただ、それを乗り越えることにより、より強固な多様性が得られるように思う。

大腸炎のことを、大腸カタル（語る）と言って、大腸が一番下等な臓器と脳は見做しているようだが、とんでもないことのように考える。